一般社団法人 日本RV協会広報誌 JRVA

JRVA PRESS

JAPAN RECREATIONAL VEHICLE ASSOCIATION PUBLIC RELATIONS MAGAZINE

2022.AUTUMN

キャンピングカーと防災を考える

灯る街の輝きに誘われて

～復興した東北を巡るジャルバくんふれあい旅～

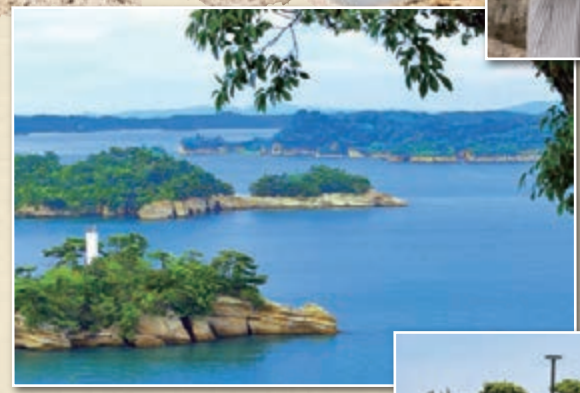
灯る街の輝きに誘われて

～復興した東北を巡るジャルバくんふれあい旅～

日本三景 松島

Matsushima

今回一人旅のジャルバ君。観光で来ていたお姉さんと意気投合。渡月橋をバックで記念に1枚。縁結びのパワースポットとして知られる松島で、この渡月橋は「悪縁を断つ橋」とも呼ばれている。



美しい景勝地から ジャルバくんの旅がスタート

観光シーズンを迎えた東北地方。各地をゆっくりと巡るには自由に行動できるキャンピングカーがベスト。そこで、最終目的地の南三陸町を目指して、ジャルバくんがふれあいの旅に出発。まず最初に訪れたのが、小さな島々が湾内に浮かび、美しい景色を見せる松島。キャンピングカーを駐車場に止めて海を見ていると、その穏やかな光景に心が癒やされる。今回は東日本大震災から復興する街の景色を見てみたい、という強い思いもあって実現した一人旅。そこには1つ1つの景色を目に焼き付けるジャルバくんの姿があった。

石巻

みんなを元気にする キャラクターたちに出会う

旧最上川の中洲にあるのが石ノ森萬画館。海から近く、津波の被害を受けたが、多くの人の応援とサポートにより復活した場所。たくさんの漫画家たちから寄せられたメッセージが今でも大切に飾られている。

石ノ森萬画館

住　所：宮城県石巻市中瀬2-7　電　話：0225-96-5055
休館日：毎週火曜日　営業時間：9:00～17:00
https://www.mangattan.jp/manga/

灯る街の輝きに誘われて

～復興した東北を巡るジャルバくんふれあい旅～

雄勝港 Ogatsu Port

大きな防潮堤が新たな景色を生む

海岸線では、いろいろな防災対策が施されている。石巻市の東に位置する雄勝港も震災前とは違った風景が広がっていた。海岸線を覆うような防潮堤が建設されている。海側に回り込むと、整備された港が岬の先端まで続き、目の前にはきれいな海が広がる。大きな防潮堤が音を遮っているのか、静かな波音しか聞こえてこない。これが震災から10年以上が経過した2022年の景色。確実に復興が進み、新たな街が作られようとしているのが分かる。今後の変化も気になるところだ。

道を走っていると時折目にする「過去の津波浸水区間」の看板。かなり内陸のほうかと思う場所にも設置されており、津波の威力にただただ呆然とさせられる。

高級丸ズワイ蟹も入っている海鮮丼（1,900円）。うに付きは2,700円。丼に入っているタコは南三陸名物。アワビなどの一級品を食べて育つと言われ、「西の明石、東の志津川」と呼ばれるほど。

南三陸 Minamisanriku

食事処 松原

住　所：宮城県本吉郡南三陸町志津川本浜町109　電　話：0226-46-2433
定休日：毎週月曜日　営業時間：11:00～14:00／17:00～20:00／木曜昼

自然豊かな秘密基地風RVパーク

東北旅の中継地点として利用できる便利なRVパーク。クルマで5分の場所に秋保温泉があり、「一日1万個売れるおはぎ」で有名な『主婦の店 さいち』もある。10分圏内には秋保大滝、キャンプ場、作並温泉、ニッカウヰスキー仙台工場等観光地も豊富。近くに釣り堀があり、近くの名取川では、夏に川遊びも楽しめる。

RVパーク　仙台秋保

住所：宮城県仙台市太白区秋保町長袋字下川原1-12
電話：090-5074-4546
料金：1泊 3,850円／1台（トレーラー含む）

灯る街の輝きに誘われて

～復興した東北を巡るジャルバくんふれあい旅～

南三陸さんさん商店街

Minamisanriku San San Shopping Street

復興の光が街を照らす

ゴールに設定したのは南三陸さんさん商店街。「サンサンと輝く太陽のように、笑顔とパワーに満ちた南三陸の商店街にしたい」というコンセプトで、2012年2月25日に仮設商店街としてオープン。そして、2017年3月3日に本設オープンした場所だ。今回の旅をサポートしてくれた、トイファクトリーの千葉さんとデルタリンクの小島さんともここで合流して、一緒に商店街を散策することになった。お土産屋さんから食堂まで、そして、地元の人々の生活をサポートするショップなどが、大きな建物に軒を連ねている。目の前に港があるので、タコなどの新鮮な海産物が充実。贅沢な丼ぶりをリーズナブルな価格で食べられる南三陸のブランドグルメ「南三陸キラキラ丼」を提供している食堂もたくさんある。

二人が食べているのは宮城名物・ずんだ餅ならぬ「ずんだソフトクリーム」。豆の風味がほんのり香る逸品。coffee & curry 月と昴にて500円で販売中。

商店街の横に志津川湾を一望できる展望台がある。以前の街並みは消えてしまったが、震災遺構となった旧防災対策庁舎を残す震災復興祈念公園が広がっている。その光景が津波の脅威を伝えていた。今だに復旧整備工事が続くなか、力強く復興する街の姿にジャルバくんは目を奪われた。

ジャルバくん特別インタビュー《被災体験者に聞く》

震災体験がきっかけで キャンピングカーオーナーに

「もしかしたら流されていたかも」情報の大切さを感じた震災体験

すべてが止まった時、必要なモノが見えてきた

きれいな景色を楽しみながら北上してきたジャルバくん。しかし、震災から10年以上経過しているのに、震災遺構があったり、変わってしまった街並みがあったことに複雑な心境だった。そして最後に、東日本大震災を経験したキャンピングカーオーナー鈴木康憲さんと待ち合わせて、貴重な当時の体験を聞くことに。

鈴木さんはアネックスのリバティ52に乗っている。キャンピングカーに乗るきっかけは東日本大震災での体験だった。震災当時、自宅は高台にあったため、被害は周りと比べて少なかったが、自宅で介護していた父親がいた。

「被害は少なかったと思いますが、家にあるものがすべて倒れて、父親の介護が続けられない状態になってしまいました。すぐに病院に行くことを決めましたが、ラジオで津波が来ることを知ったのです。当時は乗用車に乗っていたのですが、病院までの道順を変更して、津波の影響を受けないルートを探しました。そのまま進んでいたら、津波に呑み込まれていました」

病院に着くと、施設は停電していて、病院の機能は制限されていたという。しかし、父親の入院だけは受け入れてもらえたので一安心。そこから自身の避難生活がスタートした。

「水、ガス、水道、全部が止まってしまって、トイレをするのも困りました。食料はがれきの下から探して、なんとか確保しましたが、お風呂に入れなかったのが辛かったですね。都市ガスだったので、復旧まで1ヶ月かかりました」

自宅に大きな被害がなくても、ライフラインがストップしてしまったことが大変だったという。そして、その生活が続くことで疲労も重なった。

「当時はキャンピングカーで避難している人もいて、私も次はハイエースなどの大きなクルマを買おうと思いました。何よりも、自分だけの空間が確保できることに魅力を感じたのです。そして、被災時は自分でライフラインを確保する必要があると実感しました。偶然、耳にしたラジオで助かったこともあり、情報を入手できる環境が必要であることも感じています」

そして、必要と思っていた機能性を詰め込んだキャンピングカーオーナーになったのだ。

「このクルマはボイラーが付いているので、いつでもシャワーを浴びられます。食事も作れますし、トイレもあって、移動する家の部屋を手に入れたようです。リチウムイオンバッテリーでエアコンも稼働できるので、いつでも、ここで数日間暮らせるので、いざという時の安心感を手に入れました」と語ってくれた。

オーナー鈴木康憲さん
防災時に何が必要かを追求して手に入れたアネックスのリバティ52。防災に対する安心を手に入れながら、趣味のキャンプや釣りをこのキャンピングカーで楽しんでいるという。

震災時、キャンピングカーはどのような活躍をしてくれたのか

熊本地震で実力を発揮したモバイルファーマシー 長期化する被災地での医薬品供給をサポート

東日本大震災の経験から、被災地での医薬品提供が困難であることがわかった宮城県薬剤師会が企画したのがモバイルファーマシーというクルマだった。製造はVANTECHが行っていて、車内に300～500品目の医薬品を搭載でき、冷蔵庫なども装備しているという。被災地では薬の調達が重要だという。

「被災地では怪我人などの応急処置も増えますが、普段から薬を飲んでいる人たちの薬も確保しなければなりません。しかし、道路は寸断され、流通もストップすることから、機動力のある薬局のような存在が必要でした。そんな話を宮城県薬剤師会の方からいただき、VANTECHのキャンピングカー作りのノウハウを活かして、モバイルファーマシーというクルマを作りました。最初は宮城県の薬剤師会からの依頼でしたが、他県の薬剤師会からも依頼が入ってきて、クルマを準備している時に熊本地震が起きたのです」と露木さん。

露木さん自身も熊本地震が発生した時、すぐに被災地へ足を運び、救援物資などを届けたという。そして、モバイルファーマシーも集まってきて、避難している人へ薬を提供してくれた。実際の活動を通して学ぶことも多かったという。クルマはどのような場所に停めた方がいいのかなど、被災地でのキャンピングカー活用について、気づくことも多かった。この経験からも、防災でのキャンピングカー活用はさらに充実していくのだろう。

VANTECH
広報部
露木 伸也さん

オーナーの集まりでスタートした炊き出し活動を通して 「キャンピングカーは究極の防災用品」と実感

新潟県中越地震をきっかけに、被災地での炊き出しボランティアをスタートしたNPO法人キャンパー。もともとはキャンピングトレーラーオーナーの集まりだったが、何か協力できることがないかと考え、ミーティングなどで行ってきた炊き出し活動で被災地をサポートすることになった。現在では「災害時炊き出しマニュアル」という本まで出していて、東日本大震災の時は、JRVAと協力してキャンピングカーの活用をサポートした団体だ。

「2004年中越地震の時は、住む場所がないのでテントなどが必要とされていました。私たちは普段からキャンプ活動をしているので、テントなどもすぐに集めることができます。そこで、キャンピングカーで救援物資を運んだのですが、最初はレジャー用途のクルマで被災地に入ることに抵抗がありました。みなさん、日々の生活に苦労しているのに、遊びのクルマで現地にいっていいのかと考えてしまうのです。しかし、何回も被災地での炊き出し活動をしていると、キャンピングカーが究極の防災用品であると感じるようになりました」という。

普段はレジャー用途で水や食料を積んでいるので、クルマの中に生活必需品が常に備蓄されている状態。さらに、被災地で必要とされるトイレも設置できることから、飯田さんは「キャンピングカーはパーソナルな避難場所として、一家に一台あってもいいと思います」と防災用品として所有することを提案している。

NPO法人キャンパー
代表理事
飯田 芳幸さん

燃料が手に入らない時にキャンピングカーに搭載された ソーラーパネルが威力を発揮

東日本大震災でトイファクトリー千葉さんの実家が被災した。当時、岐阜の本社に勤めていた千葉さんは家族へ連絡し、すぐに救援へ向かうことを決めたという。会社からの指示もあり、発電機などの救援物資をハイエースのキャンピングカーに載せてすぐに出発。夜通しでクルマを走らせて、現地に入ったのは震災翌日のことだった。物資を降ろして、家族のもとへ。キャンピングカーは弟の居住スペースとして利用され、約1週間、クルマの中で生活することになった。そんな状況下で必要とされていたのが、電気だったという。

「実家では酪農をしていたので、搾乳機などを動かす電気が必要でした。さらに、家が倒壊してしまっても、情報を得るために、携帯電話の充電だけは必須でした。当時、ガソリンの入手も困難だったので、発電機は燃料が切れたら使い物になりません。そんな時、キャンピングカーのソーラーパネルが役に立ったのです。エンジンをかけることなく、静かに電気を供給し続けるシステムは、被災地だからこそ威力を発揮してくれました」

被災地では食料や水は確保しやすいという。しかし、プライベートスペース、情報ツールでもある携帯電話の充電電源が確保できるのはキャンピングカーならでは。そんなキャンピングカーを千葉さんは「普段は楽しい思い出を作るクルマですが、いざという時に家族を守るシェルターになってくれるクルマです」と伝えている。

トイファクトリー東北
店　長
千葉 吉衛門さん

防災グッズとしてのキャンピングカー

「ジャパンキャンピングカーショー2022」では、日本RV協会のブースに防災をテーマにしたキャンピングカーの展示エリアが設けられた。キャンピングカーの災害時の活用方法について詳しく説明されていて、多くの来場者が足を止めていた。

「日本RV協会では、東日本大震災のときに会員企業9社から20台ほどのキャンピングカーを東北に持っていきました。そこではボランティアさんの活動拠点として、また災害対策本部を設置して打ち合わせスペースとしても活用されました」と日本RV協会の荒木賢治会長が当時の状況を説明してくれた。

当初、協会としてはキャンピングカーを被災者に貸し出したい気持ちもあったが、用意できる車両台数が足りなかった。そこで、被災者を支えるボランティアの方々への支援として、この20台のキャンピングカーを活用してもらうことになったのだ。

もちろん、現地にはキャンピングカーを所有している被災者もいたという。

「自宅がいつ崩れるかわからないためキャンピングカーに避難した方、ペットと一緒に避難した方、授乳が必要な小さなお子さまと一緒に避難した方などがいらっしゃいました。このような大きな震災など、有事の時であっても安心して過ごせるシェルターとして、キャンピングカーを活用されていました」と荒木会長。

キャンピングカーが安心して過ごせるシェルターとして適しているともいう。

「空間が広いことがポイントです。熊本地震では、自動車に避難した方がエコノミー症候群になったと報道されていましたが、彼らは足を伸ばせない姿勢で寝ていました。キャンピングカーはフルフラットの就寝スペースを装備していることが条件となっているので、どの車種を選んでも足を伸ばして寝ることができます。

また、キャンピングカーはエンジン用のメインバッテリーと、居住空間用のサブバッテリーの2種類を搭載しています。エンジンをかけたり走行したりすることでサブバッテリーを自立して充電できるため、電気が遮断された環境でも、バッテリーに溜まった電気を使用することができます。被災地で一番大切なのは「通信」。情報収集をしなくてはいけないのに、携帯電話の充電がないという事態は避けたいですよね。電力を確保できる安心感は、避難時のストレスも軽減してくれるのです」

国や自治体が取り組み始めた、災害時のキャンピングカー活用

近年、国や自治体が、キャンピングカー活用に積極的になっている。このようなキャンピングカーを取り巻く状況の変化を荒木会長はどのように捉えているのか。

「東日本大震災や熊本地震などで、キャンピングカーの活躍を目の当たりにしたことが大きかったのではないでしょうか。キャンピングカーの特徴である空間の広さ、就寝スペースが確保できる点を活かし、遠方から数日かけて大量の物資を運んだ事例もあります。加えて、災害が起きたときに国や自治体の職員は現地に招集されますよね。たとえば大雨が降ったときに、役場に集められるが仮眠する場所はない、でも緊急事態が解除されるまで役場に滞在しなくてはいけない。そんな状況を改善するためにも、国や自治体がキャンピングカーを持つメリットを感じているのでは」

災害時のキャンピングカー利用は世界的に見ても一般的だともいう。

「アメリカでは自治体や政府がキャンピングカーを所有しています。それを平時はキャンプ場などに低価格で貸し出して、有事のときには被災地で活用できる仕組みがすでに作られているからです。国内でも、九州北部豪雨の被災地である朝倉市はキャンピングカーを所有して有効に活用していました。地震などの有事の時は対策本部や休憩所として、平時は観光協会がレンタカーとして町の活性化に利用しているのです。こうした事例を国内にも増やしたい、と考えています」

今後、キャンピングカーが人々の暮らしにどのような影響を及ぼすのか？　荒木会長にはその将来のビジョンが頭の中にしっかりと描かれている。

「キャンピングカーが一番活用されている観光産業では、今後ますますキャンピングカーの需要が高まると予想しています。感染症対策として公共交通機関を使わずに旅ができること、電車やバスが通っていないエリアにも足を延ばせることが「くるま旅」の強みです。更に宿泊施設のない場所であっても車中泊することができるので、旅行者の行動範囲が広がり自由度が増します。クルマで旅をするのが当たり前の時代がやってくるはずです」

さらに荒木会長は、このようなキャンピングカーの有用性をたくさんの方に知ってもらい、国や自治体、そして個人オーナーにとっても、キャンピングカーを防災グッズとしてもっと活用してほしい、と語っていた。

一般社団法人日本RV協会会長 **荒木 賢治**

JRVA 一般社団法人 日本RV協会 復興支援

DO FOR JAPAN
～キャンピングカーができること～

東日本大震災時の活動

当時の日本RV協会の増田浩一副会長（復興支援プロジェクトリーダー）より、宮城県・石巻市に記念のキーが贈呈された

被災地の介護施設の敷地内に置かれて、被災者たちの「憩いの空間」として活用されている日本RV協会のキャンピングカー

貸与式会場の石巻市「おしか家族旅行村」に勢揃いした15台のキャンピングカー

Campingcar
365 days

キャンピングカーを活用する災害協定が各地で締結

近年、日本RV協会の会員企業と行政での災害協定が盛んに結ばれている。各地域で被災した時に、キャンピングカービルダーや販売店が保有するキャンピングカーが貸し出される、という協定内容になる。キャンピングカーの活用方法は、スタッフの宿泊先であったり、プライバシーを確保しなければならない避難者向けの施設など、さまざまな用途が想定されている。行政側もキャンピングカーの被災地での有効性を感じているようで、今後もこのような災害協定が各地で締結されることが見込まれる。

ナッツ

地域と繋がり、広がる日本RV協会会員の災害協定の取り組み

会社名	公共団体名	協定概要	その他の協定先
株式会社ナッツ	九州経済産業局	九州経済産業局及び九州産業保安監督部から要請を受けた場合、可能な範囲で車両の提供に努める。	他2自治体
株式会社ダイレクトカーズ	三重県鈴鹿市	地震などの大規模災害発生時に、市の要請で同社が有償で車両を貸し、避難所などで活用する。	他4自治体
株式会社トイファクトリー	岐阜県美濃加茂市	大規模な災害が起きた際に、キャンピングカーを避難所などとして活用するための協定。	他1自治体
株式会社レクビィ	愛知県瀬戸市	瀬戸市が災害に遭った際に所有するキャンピングカーを無償貸与することと、展示場の展示車両を避難所として提供する。	
株式会社岡モータース	愛知県四国経済産業局及び中国四国産業保安監督部四国支部	職員による現地での災害対応活動を円滑かつ効率的に行うため、キャンピングカーを現地宿泊施設として活用。平時の防災訓練や研修での活用。	
株式会社 アールブイランド	茨城県常総市	災害発生時にキャンピングカーの貸し出しをする災害協定を締結。	
株式会社クルーズカンパニー	神奈川県茅ヶ崎市	災害発生時にキャンピングカーの貸し出しをする災害協定を締結。避難所の市民の皆様へ給電支援をサポート。	
キャンピングカー株式会社（賛助会員）	岡山県岡山市	岡山市において台風や地震などによる災害が発生した際に、CCKKが所有するキャンピングカーを優先的に貸し出すことにより、岡山市の災害応急対策の円滑な遂行することを目的とする。	他2自治体

岡モータース

ダイレクトカーズ

レクビィ

クルーズカンパニー（オートワン）

アールブイランド

トイファクトリー